

⑨ 所属学会……日本南アジア学会、日本宗教学会、日本印度学
仏教学会。

⑩ 研究上の画期……インドの経済開放政策への転換（一九九一年）。それまで静態的に捉えていたインド世界がダイナミックに動き出した。めまぐるしい社会変動の中で「変わりゆくインド」と「変わらざるインド」について考えめぐらす端緒になった。

⑪ 推薦図書……A・ベルク『風土学序説 文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』（筑摩書房、二〇〇二年）。

⑫ 推薦する映画作品……『神の名のもとに』（ドキュメンタリー、A・パットワルダン監督、一九九二年、インド）。

【スリランカ】
世界遺産がひしめく
美しい島に静かに眠る
人々の苦しみ

林 明

私は、スリランカのシンハラ人・タミル人との民族紛争の調査をするために、外務省専門調査員としてスリランカに一九九〇年から一九九三年まで三年間滞在した。シンハラ人とは、スリランカの人口の約四分の三を占め、シンハラ語を話し、仏教徒が中心の民族である。タミル人とは、スリランカの人口の約五分の一を占め、タミル語を話し、ヒンドゥー教徒が中心の民族である。

私がスリランカにいた頃は、タミル人多住地域のスリランカ北・東部のスリランカからの分離独立を目指すLTTE築いた城塞と城塞内の旧市街にオランダ植民地時代の面影が残るゴール、仏歯を載せた象が街中を練り歩くベラヘラ祭りや有名なキャンデー、動植物ともに多様で固有種が多く生物の宝庫であるシンハララジャ森林保護区等である。

繊細な表現に浮かび上がる静かな悲しみ

そのようなスリランカ人の明るさ・陽気さ・笑顔とは対照的に、スリランカ映画はとても繊細な感情が表現されたものになっている。ふだんのスリランカ人の明るさからすれば、スリランカ映画も、インド映画のように歌あり踊りあり笑いありの映画を予想してもよさそうなものであるが、私が見た映画から判断するに、むしろ、日本人のように繊細な感情が表現されている映画であると言えよう。

私が見た映画は、『ジャングルの村』、『満月の日の死』他であるが、ここではこの二本を取り上げたい。『ジャングルの村』は外務省専門調査員としてスリランカに滞在中に、『満月の日の死』は東京で開かれた第二回アジア・フィルム・フェスティバルで見た。

『ジャングルの村』は、イギリス植民地時代におけるスリランカの村の人間模様を描いたものである。村で辛い目に合うバブンとブンチメニカという若いカップルが中心に描かれている。この映画の中では、彼らを辛い目に合わせるのは植民地権力ではなく、地元の権力である。

E（タミル・イーラム解放の虎）とスリランカ政府軍との間の戦争も散発的にあり、また、コロンプ市内でも時々テロによる爆破事件があるなど紛争の影を多々見ることがあった。

しかし、そうした影を除けば、スリランカ（と言ってもシンハラ人多住地域の南・西部であるが）は通常は至って平和で、スリランカ人の明るさ・陽気さ・笑顔に触れる毎日とはとても気持ちよかった。私は、世界二十か国ほど訪れたことがあるが、スリランカは最も微笑みの国ではないかという印象を、また、自然の美しさという点でもスリランカは最も美しいという印象を今でも持っている。前者の点に関して言えば、スリランカでは目と目が合うとほとんどと言ってよいくらいニコツとされ、とても気持ちよく感じたものである。後者の点に関して言えば、スリランカは小さい国であるにもかかわらず、景色が多様で、海岸部では青い海と椰子の木、山間部では緑の紅茶畑と所々に見られる滝に、筆舌に尽くし難い美しさを感じたものである。

さらに、スリランカの魅力に関して挙げておきたいのは、九州よりは広く北海道よりは狭いくらいの小さい国の割にたくさんある世界遺産である。しかも世界遺産のバラエティが豊富である。貴重な仏教遺跡のあるアヌラダプラやポロンナルワ、岩山のてっぺん付近の崖壁に描かれた美しい天女たちが人々を魅了するシーギリヤ、オランダが

バブンのヴィジャヤ・クマールトウングは、スリランカの大統領となったチャンドリカの夫であった人物で、今でいうイケメンであるが、バブンという貧しい農民役を熱演していた。ブンチメニカ役のマーリニ・フォンセーカは、スリランカを代表する女優で妖艶な魅力が漂っていたが、彼女もまた苦難にあえぐ農民を上手に演じていた。

閉鎖的で逃げ場のない農村、権力の横暴に苦しむ貧しい農民の姿が表現されている映画の迫力・緊迫感に、映画を見終わった後、大分長い間、戦慄を覚えたくらいインパクトを残した映画であった。それは、言い換えれば、それくらい映画表現が優れていることの証でもある。ただし、今日のスリランカの農村は、近代化、グローバルゼーションの進展により、この映画に描かれているような農村の姿とは異なっている。

『満月の日の死』は、スリランカの民族紛争を背景とした映画である。スリランカでは、長年にわたってLTTEとスリランカ政府軍との間の戦争が続いていた（二〇〇九年五月に政府軍によりLTTE指導者バラバーカランが殺害されたことをもって戦争は終結した）。

インドとの関係などさまざまな要因は考えられるものの、内戦にまで至る紛争が生じた最大の要因は独立後のスリランカ政治にあると言えるだろう。多数派であるシンハラ人の票を選挙で獲得するため、スリランカの二大政党で

あるUNP（統一国民党）とSLFP（スリランカ自由党）が、シンハラ人の利益を優先させるシンハラ・ナショナルリズムに訴えてきたことがタミル人の政府への不満を誘い、政府と武力で対決し分離独立を目指すLTTEのようなタミル人の過激派を生み出してしまった。

ここで大事な点は、シンハラ人一般は、政治家に煽られて結果的にタミル人の不満を生じさせてしまったが、決して日常生活の場においてタミル人を憎んではいなかったという点である。むしろシンハラ人とタミル人の関係は融和や共存の関係だった。例えば、スリランカの仏教寺院にはデーワレー（神祠）というものがあるが、ここではヒンドゥー起源の神々が祀られている。スリランカの聖山スリー・パードには頂上付近に人々が崇める足跡があるが、仏教徒はこれをブツダの、ヒンドゥー教徒はヴィシユヌ神の、イスラム教徒はアダムの、キリスト教徒はセント・トマスの足跡として信仰してきた。この映画では、そのような普通のシンハラ人の、戦争に翻弄され、苦しむ姿が描かれている。

ストーリーは、農村で暮らす盲目の老人ワンニハーミは、息子のバンダラが政府軍兵士として戦っている間、家を守っていたが、ある日、ワンニハーミのもとに息子の棺が届き、ワンニハーミは息子の戦死が受け入れられないというものである。映画は淡々と進むが、静かな画面の中

にワンニハーミの悲しみが深く表現されているのが印象的であった。

現代のスリランカ社会を語る際に、民族紛争抜きにしては語れない。戦争は終わっても、民族紛争で焦点となったタミル人多住地域の北・東部への権限委譲問題はいまだに解決していない大きな問題であるし、この映画に見られたような苦しみはいまだに多くの人々に残っているからである。

歌で共鳴するスリランカと日本

この二本の映画から感じられるものは、先にも述べた繊細さである。歌あり踊りあり笑いありのインド映画も面白いが、そうしたインド映画主流の傾向とは異なるのがスリランカ映画の繊細さである。

もともと、インド映画も多様であり、インド映画の中には、芸術映画、社会派の映画が多く作られているベンガル映画を代表する監督であるサタジット・レイ監督の『大地のうた』『大河のうた』『大樹のうた』のような繊細な映画もある。『大地のうた』が東京神保町にある岩波ホール記念すべき第一作目選ばれたのは、日本人の繊細な心の琴線に触れるものもあったからであろう。しかし、このような映画はインド映画の主流ではない。

『満月の日の死』を作ったブラサンナ・ヴィターナゲー

監督は、先に述べた第二回アジア・フィルム・フェスティバルでのメッセージとして、「スリランカの不幸は民族紛争によって引き起こされている。その結果、多くの人々の人間の尊厳が侵されている。芸術家として、私は国民の鼓動をとらえ現状を明らかにすることが義務であると感じた。私は、映画の中で登場人物をできる限り忠実に描こうとした。日本の人々は戦争の悲惨さを誰よりも理解していると思うので、それだけこの映画に共感できると信じている」と書いている。これは、スリランカ人の繊細な心が日本人の繊細な心に届き得る可能性をスリランカ人自身が直観的に感じ取っている言葉である。

このことに関連してお話したいのは、スリランカのバイラ音楽として取り上げられた日本の歌である。

バイラ音楽とは、スリランカに最初にやって来たヨーロッパ勢力であるポルトガル人によってもたらされた舞曲曲に由来するものであるが、その後、民衆に広く受け入れられ、今日では大衆音楽となっている。陽気なメロディーが多く、今にも踊り出したくなるような曲が多い。

そのバイラ音楽の中で、マリアゼツレという有名な女性歌手がシンハラ語でカバーしている曲に竹田の子守唄がある。竹田の子守唄は、一九七〇年代にフォーク・グループの「赤い鳥」が歌って大ヒットしたが、現在では忘れ去られている感もある曲である。この歌のメロディーは大変美

しいと同時に物悲しく、聞いていると郷愁にも似たまさに日本人の心を感じさせてくれる。この曲をスリランカの歌手が発掘し、歌っているということは、スリランカ人の心と日本人の心が共鳴し合うところがあることを示しているのではないだろうか。

だが、スリランカ人の面白さは、心の奥底の心情面では日本人の心とも通じ合うように繊細でありながらも、日本人は表面は感情をあまり表に出さないほうで、人と人が仲良くなるまで時間がかかる傾向があるのに対し、スリランカ人は表面は明るく陽気でも人懐こいところである。この点はむしろインド人との共通性を持っている。このギャップが面白い。

スリランカと日本——古都を戴く島国

最後に、スリランカと日本の共通点として筆者が観察した興味深い点二点を挙げて本稿を締めるところにしたい。

一点目は、海に囲まれた島国であるという点である。そのことに付随して小さな範囲でものごとを考えがちなどころがある。そして隣に大国（スリランカの場合はインド、日本の場合は中国）が控えており、大国から政治面、文化面等で大きな影響を受けてきた点も共通である。

二点目は、コロomboが東京に当たり、キャンディが京都に当たる点である。コロomboはスリランカの中でいち早く

ヨーロッパの影響を受けた都市であり、古都ではなく比較的新しい都市である。キャンディがスリランカの中では最後までヨーロッパの勢力下に入らなかった都市で、現在まで伝統の雰囲気をも色濃く残しているのと対照的である。

東京もコロomboと同じで古都ではなく比較的新しい都市であり、近代以降は、日本の中でいち早く西洋化、近代化していった。京都はキャンディと同じで伝統の雰囲気を最も色濃く残している都市である。コロomboのある低地をパハタ・ラタ、キャンディのある高地をウダ・ラタと言いつ、今日、両者は対抗意識を持っているが、これは、東京と京都を含む関西との対抗意識と似ている。東京は、その前身である江戸が一五世紀後半の太田道灌の頃から開発が進むが、コロomboは、ポルトガルがスリランカ西海岸に拠点を築いた一六世紀前半に作られており、歴史の長さという点でも共通している。

●注

*1 本稿では、「スリランカ人」はスリランカの人口の約四分の三を占めるシンハラ人を、「スリランカ」はそのシンハラ人多住地域の南・西部を念頭に置いている。

*2 第二回アジア・フィルム・フェスティバルのパンフレット中のヴィーターナゲー監督の英文メッセージを筆者が翻訳したものである。

●参考文献

- 林明（一九九四）「スリランカの民族紛争とインド」辛島昇編『ドラヴィダの世界』東京大学出版会、四四二―四五四頁。
- 林明（一九九七）「スリランカの民族紛争とインド・スリランカ関係」近藤則夫編『現代南アジアの国際関係』アジア経済研究所、七一―〇九頁。
- 林明（一九九八）「政治によってつくられた紛争——民族紛争の過程」杉本良男編『暮らしがわかるアジア読本 スリランカ』河出書房新社、二六三―二七〇頁。
- 林明（一九九八）「インドから見たスリランカの民族紛争——タミル・ゲリラと国際関係」杉本良男編『暮らしがわかるアジア読本 スリランカ』河出書房新社、二七九―二八六頁。
- 林明（一九九九）「シンハラとタミルの対立」大森元吉編『スリランカの女性、開発、民族意識』明石書店、一九五―二〇九頁。
- 林明（二〇〇〇）「国家の危機と地域——南アジア」木村靖二・長沢栄治編『地域の世界史二 地域への展望』山川出版社、八六―一二四頁。
- 林明（二〇〇四）「スリランカの民族紛争と国民国家——独立後の政治及びインドとの関連——」『社会科学研究』第五五巻第五・六合併号（東京大学社会科学研究所）、一六七―一八二頁。

映画リスト

- 『運命線』……①Rekava、②レスター・ジェームズ・ピーリス、③一九五六年、④スリランカ、⑤シンハラ語、⑥合同アジア

映画祭（二〇〇〇）。

- 『ジャンケルの村』……①Baddegama、②レスター・ジェームズ・ピーリス、③一九八〇年、④スリランカ、⑤シンハラ語、⑥南アジア映画祭（一九八二）。
- 『大河のうた』……①Aparajito、②サタジット・レイ、③一九五六年、④インド、⑤ベンガル語、⑥劇場公開（一九七〇）、DVD販売。
- 『大樹のうた』……①Apur Sansar、②サタジット・レイ、③一九五九年、④インド、⑤ベンガル語、⑥劇場公開（一九七四）、DVD販売。
- 『大地のうた』……①Pather Panchai、②サタジット・レイ、③一九五五年、④インド、⑤ベンガル語、⑥劇場公開（一九六六）、DVD販売。
- 『パイ・ムーン』……①Me Mage Sandai、②アソーカ・ハンダガマ、③二〇〇〇年、④スリランカ、⑤シンハラ語、⑥東京国際映画祭（二〇〇一）。
- 『満月の日の死』……①Purahanda Kaluwara、②プラサンナ・ヴィーターナゲー、③一九九七年、④スリランカ、⑤シンハラ語、⑥第二回アジア・フィルム・フェスティバル（一九九七）。
- 『やましい女』……①Oba Natuwa Oba Ekka、②プラサンナ・ヴィーターナゲー、③二〇一二年、④スリランカ、インド、⑤シンハラ語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭（二〇一一）。

- ①氏名……林明（はやし・あきら）。
 ②所属・職名……弘前大学人文学部・准教授。
 ③生年・出身地……一九六〇年、東京都。
 ④専門分野・地域……南アジア近現代史、インド・スリランカ。
 ⑤学歴……一九八三年三月、東京大学文学部東洋史学科卒業。
 一九八六年三月、東京大学大学院人文社会科学研究所東洋史学専攻修士課程修了。一九九四年一二月、東京大学大学院人文社会科学研究所東洋史学専攻博士課程修了。
 ⑥職歴……一九八七年七月～一九八八年七月、インド・デリー大学留学（東京大学・デリー大学交換留学生）。一九九〇年五月～一九九三年四月、在スリランカ日本大使館外務省専門調査員。一九九五年四月、弘前大学人文学部講師。一九九六年四月、弘前大学人文学部助教。二〇〇七年四月、弘前大学人文学部准教授（職名変更）。
 ⑦現地滞在経験……インド（東京大学・デリー大学交換留学生）、二七歳～二八歳、一年間。スリランカ（外務省専門調査員）、三〇歳～三三歳、三年間。
 ⑧研究方法……現在、ガンディーの運動の継承、ガンディーを巡る日印関係を研究しており、テーマの関係上フィールドワークはとても重要である。方法としては関係者へのインタビューが中心である。
 ⑨所属学会……日本南アジア学会。
 ⑩研究上の画期……カルカッタの奇跡（一九四七年九月）、デリーの奇跡（一九四八年一月）。大学一年の時に『今夜、自由を』という本に出会った。それは、一九四七年八月のイン

ド・パキスタン分離独立の頃を時代背景としながら、ガンディーの生き様を描いた本である。インド・パキスタン分離独立に際しては、ヒンドゥー教徒・イスラム教徒間の争いで多くの血が流されたが、その『今夜、自由を』の中で、ガンディーが命を懸けた断食によりヒンドゥー教徒・イスラム教徒双方の多くの人々の「心」に訴えかけ、カルカッタやデリーで両教徒間の争いを鎮めてしまった話（カルカッタの奇跡、デリーの奇跡）にとっても感動を覚えた。私は、この話に感動したことをきっかけに、ガンディーそしてガンディーを生み出したインドとはどのような国なのかに興味を持ち、インド研究の道へと進んでいった。

⑪推薦図書……ドミニク・ラビエール、ラリー・コリンズ『今夜、自由を——インド・パキスタンの独立』（杉辺利英訳、早川書房、一九七七年）。

⑫推薦する映画作品……『ガンジー』（リチャード・アッテンボロー監督、一九八二年、イギリス、インド）。